

養源院の障壁三画構成

山岡泰造

養源院の客殿は、現在は創建時のものに復元・改築されて、通常の六室構成のものとなっている。その障壁画は狩野常信の流れを汲むものと推測される花井常棟・花井常俊を中心とする画家たちによって画かれたものであるが、保存状態が悪く、マクリとして保存されて居り、断片として残るものが多く、全体の構図やどの室に配当されたかという点については確実なことは不明といわざるを得ない。しかし題材の種類は確認でき、龍図、花鳥図二種、人物図二種（四愛図・四季耕作図）、山水図二種である。これらは勿論創建当初のものではないから、客殿（方丈）のものだけではなく、書院のものが含まれていることもあり得る。強いて画題を各室に配当すれば、室中に龍図、上間側二室に人物図、下間側二室に花鳥図ということになるうか。

因みに復元・改築前の佛間は、後方に突き出て昭堂となっており、その東西の壁と奥壁には金地極彩色の松図と梅図が貼り付けられている。この部分の障壁三画は、妙心寺開山堂（玉鳳院）のものを転用している。開山堂の障壁にはさまざまな画が配されるが、ここでは桃山時代の典型の一つである金地の花木図が画かれ、禅宗の開山堂にも時代の最新流行の画が配されていて興味深い。このような例は、深草の法華寺院宝塔寺本堂の奥左右におかれた日蓮上人像と本寺開山日像を祀る厨子中の内壁に松図と梅図を金地に極彩色で画いたものがあり、参考になるうか。な

お養源院の図は、大木の幹を横臥するように配し、そこから大枝が粘り強く伸び上がっている。このような横臥気味の幹や、粘りのある屈曲を見せる枝ぶりは、永徳時代の直線的で鋭い表現の次の段階を示すものであり、妙心寺の遺品からみると狩野山楽あたりの作風に近いものではないかと思われる。